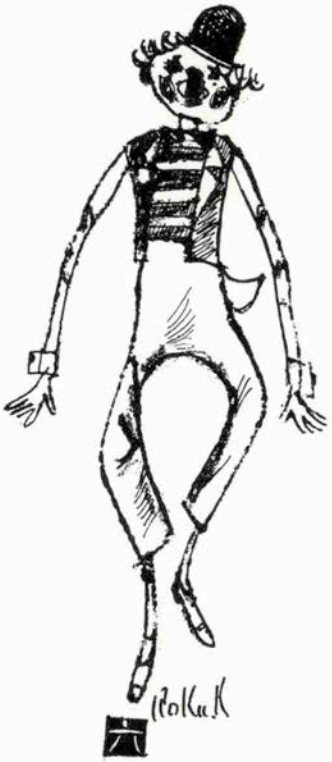
□れんさいずいそう〈4〉

神戸のおしゃれ

楠本　憲吉

え・貝原　六一



神戸と横浜は、同じ港町で、どちらも大阪、東京といった大都市をそばに控え、類似性のある町として対比されるが、私は、体質的に見て、全く違った都市であると見ている。

つまり、神戸がヨーロッパであるとすれば横浜はアメリカだということである。

それは、この二つの街に住んだ外人の差からきているものと思う。

政治的な用務で日本に住んだ外人の多い横浜に対して、市民と直接のかかわりあいを持った商目的の外人が多い神戸、そのことが案外、両市の性格に何らかの影響力を持ったものと思われる。

神戸にかかわりを持った——というよりは神戸をふるさととして生きた外人たちによって、神戸の町が持つにいたった個性は、もう一つの異人町横浜のそれとはまた違った色彩をかもしていて興味深い。

ハンターやハンセンのような技術畑の人たちから、六甲の自然を開いて今日あらしめた英人アーサー・H・グルームらをはじめ、神戸の全人口一三〇万人のうち三万五千人を占める外国人にいえることで、神戸と「異人さん」の結びつきは固く且深いものがある。

神戸ファッションは、ヨーロッパ的だと私がか

ねがね思うのも、この辺の事情に原因しているのである。

ファッションはそれを売り出す町の商店に始まり、それを買い、着て歩き、おしゃれを楽しむ男女によって展開されていく。

そごう神戸店と大丸神戸店を最短距離で結ぶ「三宮センター街」は、神戸市内随一の商店街である。この商店街の山側・海側にズラリ、ファッションを売るお店が並んでいるのである。

これらの店の持ち味は、大阪心斎橋筋や、キタやミナミのお店の味とはまるっきり違う。いわゆる垢抜けのした、且、エキゾチックな雰囲気を漂わせている。東京の銀座や横浜の元町などのお店の持つ、取り澄ましたところもなく、きわめてアットホームなのだ。

大阪のガメツイ商法にくらべると神戸のそれは人の好い商法と見るべきであろう。

新しく開かれた地下商店街「さんちかタウン」は一万八一四〇平方メートルの地下街に百四十余軒の専門店がオープンフロア式にひしめいている。ショッピングの目的や客層によって、レディス、メンズ、ファミリー、ハイモード、P・R、スイーツ、ファンシー、サロン、珍味街、味ののれん街の十タウンに分けられている。

三宮界隈が戦後派ムードとすれば、元町通りは戦前派ムードである。元町にはゆったりとした風格があり、三宮には充実したエネルギーが感じられる。

三宮界隈はサンダルや下駄ばきで歩けても、元町にはそうは参らぬ風格がある。

この通りをそぞろ歩くことを神戸っ子は「元ブラ」とよんでいる。

紳士服飾の「ウネ」、カバンの「大上」、ネクタイの「元町バザー」、ワイシャツの「神戸シャツ」などなど、男っぽいモードを売る、懐しい店舗が軒を並べて、私に

「やあ、お帰んなさい。」

と声をかけてくれるような気がする。

東西に走るセンター街、元町通りに対して、南北に貫く道に生田筋とトーアロードがあり、いずれもセンター街と交わっている。

トーアロードは大丸の東から山手へゆるく上る道で、サルスベリの並木と華僑の店の建ち並ぶ、いかにも神戸らしい垢抜けのした通りである。

手造りの小さな靴屋、婦人帽の専門店、オランダの木靴の並んだシャレタ洋服屋、ユダヤ人の宝石店、中国服の専門店などがひっそりと並び、ショッピングを楽しみながら、同時に散歩も楽しめる、まことに優雅な道である。

この通りのカフェ・テラスでも腰をかけ、外を行き来する女性を眺める楽しみも、神戸へ来る楽しみのひとつである。

花開く青春を謳歌する乙女たちの華やいだ服飾若い奥様のモダーンだが安定したファッション、混血娘のスポーティな肢体、外人の颯爽としたモード……。

ナウなファッションがいっぱいに楽しめて、いつまでも時を忘れる私なのである。

街騒やなだるるごとく春服地　　憲吉

〈俳　人〉

□れんさい随想〈4〉

ブラジル無宿

津高　和一
〈画家・大阪芸術大学教授〉

僕のアトリエの書架の棚に一段低い蔵書の列がある。その中ほどに、縦七㎝横三㎝、巾五㎝の小型の分厚い本がある。その背文字、IV BIENAL SÃO PAULO BRASIL 1957。同じく5ª BIENAL, 1959。同じく SETEMBRO-DEZEMBRO-P, IBIRAPUERA-MUSEV DE ARTE MODERNA-SÃO PAULO-BRASIL。

この色褐せた二冊の本は、十数年以前出品したサンパウロビエンナーレのカタログであった。

時おりその背文字を目にするとき、必らずといってよいほどサンパウロのことや、リオデ・ジャネイロでのことが瞬間に頭の中を横切るのであった。ただ、それだけのことでなんということもなかったが、時にはそれが街の風景になったり、当時交流した人々のおぼろげな顔になってちらつくこともあった。

おもえば最初ブラジルに渡航したときから十数年が過ぎてしまっていたのである。僕の頭髪も純白になるのも当然だった。一昨年、とその前年の二回連続して個展開催のためにブラジルに行き、久しぶりに懐しい人々とも出逢ったが、僕の頭髪を見て誰もが驚いたように眼を見張るのである。白くなった、という。本人の僕はもうずっと前からこんな状態であったと思いこんでいたが今さらのようにその頃のことを想い出し、あの頃はまだ黒かったのか、と秘かに自問自答のくりかえしをした。

十数年前という年月は僕にとっては一貫した制作の連続であり、それに付随する諸々の生活の延長線上の出来ごとで、なにほどまでの変貌も意識していなかったのであった。その間、緊張や弛

緩の曲線はあっても、自分を核にした展開でもあった。

当時、サンパウロの日系人たちの中で、絵を描く人たちが集まり聖美会というグループを作っていた。日本から渡航して行った画家はいつも彼等のなんらかの世話を受けていた。

戦後間もなく日本脱出を計り、渡伯した藤田嗣治もその例に洩れなかった。時たま彼の作品とも思わぬところで出会ったものである。また、菅野圭介、栗原信、福沢一郎等の作品ともお目にかかった。彼等もすでにこの地の日系人たちから歓待を受けて、作品の発表展などもやった様子だった。

当時、渡伯前に聞いた話では、義理人情に厚くて、『明治の人間を見たければブラジルへ行け』といった、大宅壮一氏の言葉はまだ通用していたのである。

時にはそれに反発をする日系人たちもいたが、大体日系の一世たちの気風はそのようであった。

当時、ブラジルで絵を描いていた人には、少年期、青年期に日本で何等かのかたちで絵と馴染んだ人々だった。両親たちの移住に従って渡航し、環境が変ってもかねて習得したものを持続していたのである。不思議なことに当地で生れた二世たちは、芸術と無縁の職業が多かった。

そのことは非生産的なことでもあり移住当初の生活困難な営為の中では思考の限りではなかったのだろうと思われた。そのせいもあってか聖美会グループの人たちは熱心だった。日本流にいえば日曜画家の範疇に入る人々が多く、中には日本の旧制の美術学校出身者もいて実にピンからキリまでというのが実情だった。

一族と共に移住してきたこの新天地で、精神安定剤の役目もしていたのであろう。

イプラプエラ公園のビエンナーレの開催される美術館での仕事は壁面が出来上ると、作品の配置展示等実にあわただしいことだった。

国際展のことにもまだ経験の薄い現地の日本公館関係者はとまどいがちだった。

当時、ポルトガル語が自由に話せるのは公館側では現地雇の某氏一人くらいで、すべて彼が通訳と雑務を引き受けていたのが現状だった。

国際的な儀礼でもある各国間のコミッショナー及び作家たちの招宴も後手々々に廻ったりした。

そんな折、僕はコミッショナーのT氏と激突した。後からおもえば大人げないようなことでも、当時の僕は血気に湧いていた。夫人同伴でコミッショナー氏の独断で作品が次々と展示されたりし空いばりの権威主義を振り廻すありさまに、このスカタン野郎、とおもったものである。事実団体展とか、展覧会についての具体的展示については、かねて豊富な体験もあり、客観的にも全体のイメージ作りには自信もあった僕に一言の相談もしない、ということにも内心面白くおもってもいなかった。

それが、突如として爆発したのは、日本側出品作品の支持をしなかったということを聞いた時点から決定的な忿懣へ移行したのである。

『なんのためのコミッショナーなのか、旅行目的の物見遊山ではない筈だ』

と詰問もした。だが、考えて見れば、日本の批評家側の輪番制派遣ということにも問題があったのである。

□ずいそう

NOW FASHION

ニューヨーク パリ

志村 雅久
〈そごうチーフデザイナー〉

今年もまた、早春のヨーロッパからニューヨークをぶらぶらしてきた。ニューヨークのマジソン・アベニューの六十八丁目の角に、今をときめくホルストンの白い店がある。吹き抜けのある一階のサロンの白いマネキンには、今シーズン話題になった彼らしいニットの作品が無造作におかれている。あるものは中国の陶器のような淡いグリーンで、セーターとパンタロンがセットされ、それに同色のカーディガンを肩に結んだ着こなし、また、ジャクリーン・オナシスが買ったロングのニットは、若い鶯の羽根のように純粋な黄色で、これは大きなサングラスとの着こなしになっているまさしく、ニューヨークのエレガンスである。自然でナイーブで、そしてどこかドキッとさせる程現代を感じる。二階のサロンはさらに高級な服になる。一人の黒人の若いマヌカンのような女性が、きびきびと客を応待している。黒のポロシャツと黒のソフトパンツ、腰にオブジェのような銀の輪に、黒の皮ひもを無造作に結びつけた着こなしで、ホルストン・レディを感じさせる。ホルストンのアクセサリーはエレサ・ペレッティーの創作である。サロンの隅におかれた中国製の花瓶にはやさしい白のフリージャの花がもられ、そのかおりが、来客に春をつげていた。

ニューヨークはいつ来ても心がほのぼのと開放される。そして最近のニューヨークはとてもソフィスティケートされ、まさしくエレガントである。しかしそれはヨーロッパのそれとは違って、もっと人間の心のふれあいのようなものを感じさせる。その反面、おそろしく創造的な何かが、そのスピリッツを現代のものにしている。夜、ごひいきのジョフリー・バレエに通う。シティ・バレ

カット／中島節子

エの大がかりな演出より、このシティ・センターの小さなホールで踊られるジョフリー・バレエに、この数年酔いっぱなしである。ジョフリーのすばらしさは、まさにダンサーの肉体、音、照明もさることながら、「Gerald Arpino」の振り付けがみごとである。彼のレパートリーに「AFTER EDEN」という、アダムとイブの失楽園をテーマにしたものがある。天と地の空間を象徴的な照明で表現する、これがすばらしい。そしてギリシャ神話のアポロの再来のような金髪の若者がアダムを踊る。実に静かだ。しかし人間の肉体がこんなにも美しいものだったのかとうなってしまう。今シーズンのジョフリーは数本の新作を出していたが「JIVE」の中の衣裳を中国人の「WillaKim」が担当して、アッといわせていた。ニューヨークの美術館ではフリッツが好きである。絵の良し悪しより、この華麗な邸宅の中におかれた、ゴヤやベラスケスを楽しんでいるレディ達がすばらしいからである。フリッツにはすごくエレガントなパティオがあり、その噴水のそばにはいつも着飾ったニューヨークのレディ達がおしゃべりをしている。今年のフリッツの彼女達は、なんとソフトで洗練されていることだろう。

エレガンスでもパリに行くとだいぶ厳しいものになる。サンローランのサロンで彼の新作のオート・クチュールのショーを観るとき、いつも思う、このエレガンスはパリだけのものだと……。それはやさしさとかゴージャスとかをはるかにこえた、もっと大人の女のプライドが磨きぬかれたような、ピシッときまってくるエレガンスなのである。カトリーヌ・ドヌーブのようなマヌカンがオープニングに、さりげなくネイビーブルーのパンツと男物のような固い肩をもつテーラード・スーツで登場する。ソフトなシルクデシンのプリントのブラウスは渋いブラウンと紺の配色で、金属製の重いブレスレットが全体の調和をしゃれたものにしている。次はアフリカ産の髪の短かいマヌカンが、白いリネンのこれもマンテーラード・スーツ。ものすごく深く開いた胸あきに、これはシャツもブラウスもなく冷たく光る金のネックレスのみで着こなしてみせる。マヌカン達の瞳は、はるか彼方をみつめて、顧客を完全に無視したようなさりげなさで、それでいてきめのこまかい着こなしでみせる。まさしく上等なエスプリである。本物の大人の女の世界である。

これはパリだけのもつ、それも春のセーヌやサンジェルマンのあの安らぎとは別のパリのサロンのつくる厳しい女の世界なのである。こんな時、ジジ・ジャンメールという女性をいつも思い出す。カジノ・ド・パリの彼女のあの登場のにこやかさには、決して妥協のないパリの強い女をいつも感じるからである。今回はちょうど、彼女のご主人のローラン・プチがピンク・フロイドと共演する大バレエが話題を呼んでいた。ぎっしりつまった観客、沸き上る歓声のあの涙の出るような興奮は、日本では味わえない。すごく残念である。これもサン・ローランが衣裳を担当していた。この公演のすばらしさは、とても専門外の私などがいろいろ論じると、かえってみじめな気分になってしまうのでやめておく。ただ、この公演をそっくり日本へ呼べたらとふっと思った。

創業75周年

神戸元町 風月堂

本店／元町3丁目　TEL 391－2412

さんちかスイーツタウン店　TEL 391－3455

Kitamura Pearls

可憐に咲いた一輪の花
小さなつぼみに包みこまれた
優しい愛　愛のバラード

北村真珠店

元町2丁目60　TEL 331－0072

特集〈1〉ファッション都市への道／座談会

ファッション都市への展望

畑　専一郎〈神戸新聞主筆〉
難波　還〈神栄株式会社社長〉
福冨　芳美〈神戸ドレスメーカー女学院長〉

★神戸の産業の方向

畑　これは「神戸っ子」三月号の座談会でも申しあげたんですが、日本列島改造論で、今後は神戸も産業構造を大きく変えないとやってゆかれへん。いつまでも鉄や造船が町のまん中で腰をすえてるわけにはアカン。そういうことで、ファッション都市化が出て来たんです。具体的な一方法として、FITのような人づくりの機関もいるというハナシも出てますが、えらいもんでニット関係の企業などでは、この声をきいただけで従業員のモラールが高まってきたということを業者の方から直接ききました。ただ具体化に当たっては市にまかせっきりというのじゃなくて、業者の方の意見なんかを取り入れたり、まとめたり、またわたしのような立場の人間からもいろいろ意見を出して行くのがいいのではないかと思います

難波　神戸をファッション都市にということについて、商工会議所の砂野会頭の方からご発言があったときいておりますが、その下地は確かにあると思います。戦前から神戸には元町とか、トアロードとかというセンスのある素晴しいところがありました。東京だと銀座なんかそれに当たるのでしょうか。それでも、神戸の方がはるかにセンスがいいと思います。

福冨　そうですね。実は最近、横浜の元町は素晴しくなったが、神戸の元町はだめだという話をきいたものですから、先日横浜まで実際にみにいったのですが、この目でみてみますと、そんなことはないと確信しました。向こうは、商売に徹して何か色々なことを、それこそギラギラギラギラとやったけれど、肝心の風格というものが全然ないのですね。神戸の元町は、やはり神戸だけのものだと改めて思いました。

ところが残念なことにトアロードは昔にくらべると趣

きがなくなりました。ここは、北野町の上の方から降りてくると素晴しいですから何とかしていただきたいですね。また、北野町のもつ雰囲気も横浜にはありません。素晴しい、貴重な場所です。ここからトアロードを降りてくると元町がある。そこにはまた異なる雰囲気がある。一方、若いひとにはセンター街がある。すべてが神戸にはきれいに揃っているのです。ファッション都市としての下地は十分にありますね。

難波　ただ、市長なんかも考えておられる市民大学ということについては少し危惧があります。それをつくって市民の意識を盛り上げていくことは確かに必要だと思います。が、正直いって、その実効性は余りないと思う。むしろ、KFA（神戸ファッションアソシエイツ）を側面から援助するというように経済性をもっと打ち出してくれないと、たんなる文化運動ということで終るんじゃないかと思います。文化性ということなら市民大学というのじゃなくて、たとえば神戸大学にデザイン科を設ける方がいいのじゃないかという考えなのですが。

畑　導一郎氏

畑　勿論、私もせっかくの市民大学を不特定者対象の花嫁学校のようにするのでは、何の意味もないと思います。いかに将来のFITにつなぐか、具体性のあるものでないとアカヘン。現在でもたとえばニットとか、家具とか、お菓子やケミカルシューズとかのファッション企業では、苦労して、勉強のため社内研修というのをやっておられるが、これをまとめた形の市民大学（講座）にする。FITにしても今は生徒数が六千人もいますが、初めは小さな教室から出発しております。この市民大学に小磯良平さんなんかおまねきできれば、象徴になるのじゃないか。とりあえずそんな形で出発して、一方で市民大学運営委員会をつくって、将来の内容を検討してゆく。市民大学といっても講座にしか過ぎないんだから、それをホンマモンの学校にする検討を一年かかってやれば、その次の年はなんとかならへんヤロカというわけです。

難波　よく分かりました。花嫁修行みたいなことでないならいいわけです。一つのはっきりした目的のある大学講座ということでしたら何もいうことはありません。

福富　私はかつてニューヨークのFITやその他の幾つかのファッションの学校を直接見聞してきたのですがそれぞれ異なる性格を持っているのですね。FITはどちらかというと、職人を（縫い子の少し上のレベルですが）養成する学校なのです。そこに出資している業者も小さなところです。そして出資をするから卒業をしたら

自分のところへ働きにきてもらうということですね。したがって、そこでは全体的な勉強をさせるというのではなくて、様々な分野から一つをとりだして細かな技術ばかりを習得させるのです。昼間部はそうでもないのですが、夜間は特に細分化されておりますね。だから、当然学校の規模も大きくなっていて、そんなりっぱなものを神戸につくるといっても国家が援助をしてくれないと到底できないと思います。だから、神戸独自ではなかなか難しいのじゃないかなあと思ったりもします。

ところで、ニットやブラウスなんかは神戸が一番ですね。ところが、これからはそんなこともないでしょうが神戸のそういう仕事場で働いていた腕のいいひともいつの間にか、神戸にいてもしょうがないということで、みんな東京へ行ってしまうのが今までの現状だったのですね。だから、色々と困難はありますが、神戸にファッションを定着させるためにも学校なんかは確かに必要ですが、やはりそれが経済にも結びつくということですね。

難波　還　氏

畑　ええ、勿論、そうでなければアカンと思います。

難波　神戸の産業の今後の変貌ということを考えると、やはり知識型産業へと向かわざるを得ないですね。ただ東京や大阪のようにマスプロ的な方向というのじゃなくて、神戸は頭脳、つまり知識集約型でやって行くべきだと思います。そのような基盤は昔からありますし、当然そういう特色を生かしていかないといけないですね。

福富　そうですね。また、神戸の外国的雰囲気というものは東京や横浜がアメリカ風なのに対し、昔からの外国航路の関係でヨーロッパ風、それもとりわけイギリス風なんですね。そういうことから伝統的にいいものがずっと残っているのです。女性ファッションは勿論ですが、特に男性ファッションは伝統的に神戸が随一です。昔から残っているいいところを生かして気運を盛り上げて欲しいですね。

難波　確かに神戸はヨーロッパ風です。ファッションは創造的であり、かつ、個性的であることが絶対的な条件ですが、同時にインターナショナルなものでもなければいけませんが、その面の素地も神戸にはありますね。

福富　神戸は、たんに日本や外国からのひとが通過するだけじゃなくて、フランスのポール・ド・ベルサイユとか、ドイツのデュッセルドルフと同じように日本におけるファッションの市場にならないといけないと思います。

★世界のファッション動向

福富　昔は女性ファッションの中心はフランス、男性はロンド

ンでした。既製服のない時代には、パリのオートクチュール組合というところが一月と七月の年二回、コレクションの発表会を開き、そこに世界中からひとびとが買いつけに集ってきたのです。世界一の市場であったわけです。その後十年位前からイタリアのフィレンツェのピッツァ宮でも同様の発表会をするようになりました。しかし、余り大きくならない内に、今度は既製服が盛んになってきたのです。今ではパリの市場はオートクチュールと、それに先がけて、四月と十月に発表される既製服の発表会がポールト・ド・ベルサイユの大会場で行なわれています。これは、それまで業者が個別に発表会をやっていたのですが、それでは世界からひとを集めることができないというので、みんなが一諸になってやり始めたものですが、今ではこっちの方が有名、有益ということになっています。日本からも多勢買いつけに行っております。やはり、ファッションでは今もパリが一番です。

また、ニューヨークにはザ・ファッション・グループというグループがあります。これはファッション関係のメーカーとか雑誌とかの仕事に携っていて、しかも、地位とか経歴のあるハイレベルの婦人たちのグループなのですが、これが大変な力と権威をもっていて、支部も世界中にあります。ここがこの六月に日本でファッションショーをやる予定をしています。このグループなんかをもっと勉強する必要がありますね。

ファッションコウベのイメージは湧くが……岡田淳

★ファッション都市の条件

福冨　今までは既製服ということでは大阪でつくっていた部分が多かったのですが、これからは、ファッションに関しては神戸が大阪や京都を引っ張るということですね。だから、ファッション産業を盛んにしょうということを呼びかけるときにも、関西のファッションということで大阪なんかもその中に組み入れてしまうことが心要なんじゃないかと思います。

畑　そうでしょうね。さいわい京都あたりからも自分のところの和服と神戸の洋服とが手をつないでやっていけないかということでKFAの方に問い合わせが来ているということをきいております。

福冨　京都にも生地屋なんかがたくさんありますし、神戸だけがファッション都市の条件があるということで落着いていることは許されないと思います。それに、神戸はセンスがいい、センスがいいといわれておりますが、じっとみていますと、大阪はそれほどでもないのですが、京都はぐんぐん、ぐんぐんとよくなっていますね。ファッション自体も変ってきています。というのは、和服をみる眼が肥えているので自然とファッション全体に対するセンスもいいということです。だから、洋服に関してもセンスがいい。ぼやぼやしているとファッションの面でも神戸は置き去りにされる心配があると思います。今頑張らないとだめですね。

畑　京都では顔見せとかで和服をみせる機会がとても多いですね。だから神戸でも場所によってはタキシードを着なければいけないというような パーティ や店の試みもやってみたいですね。

福冨　先日、東京のある女性との話できいたことなのですが、最近の女性は洋服をつくる機会はいくらでもあるというのです。ところが、肝心のそれを着るチャンスがないので、それを求めていると。だから機会を与えてやらないといけないのです。今、ホームソーイングという言葉がはやっていますが、家庭の主婦が自分の洋服をつくって、三カ月とか六カ月ほどの勉強の最後に、それを着て歩ける場所が欲しいといっています。ファッション性ある服を自由に着ることのできるパーティをやりたいといっています。着る場所が絶対に心要です。神戸にまずそういう社交の場をつくらないといけないですね。そうしたら京都からでもどんどんやって来ますよ。本格的にやればどこからでも来ますよ。つくってみてもそれを着る場所がないといいものはつくれません。そして、神戸へ行けば社交の場があるということで、京都や大阪を引きつけることですね。

畑　なるほど……。

福冨芳美さん

難波　京都でのパーティといっても、歌舞伎をみに行くとか、お茶の会とかになるのじゃないですか。

福冨　でも、京都には戦後、アメリカ軍がいた時分からパーティの機会というのは割と多かったようです。神戸にはそういうのは余りないですね。昔は塩屋とか芦屋とかにあったようですけれど。

――パーティの成功率というとやはり神戸ですね。大阪では余りうまく行かない。話をしないのですね。

難波　そうです。大阪では「久しぶりでんな、もうかりまっか」という位しか話題がないですよね。

福冨　ですから、やはり適切な場所でパーティをやって欲しいですね。

難波　それはどういう形のものですか。

福冨　アメリカでやっているようなものです。食べものとか飲みものとかがゴチャゴチャとあって、あっちでもこっちでも、やあコンニチワと気軽にあいさつを交わしおしゃべりをするというような形でいいのじゃないかと思います。

難波　家庭的なパーティというのじゃなくて、どこかのグループとか会社とかが主催するという形ですね。

福冨　ええ、それでいいと思いますね。とにかく、先ほどから申しておりますように、女性にとって美しい装いのできる場所がないのですよ。結婚式といっても着て行くものは留め袖とかいうように決っていますしね。だから、パーティのように自由に何でも着て行けるというのが一番楽しいわけです。

ファッション都市へのスタート

難波　企業としての立場からいいますと、日本がこれまでにやって来たように、マスプロ製品をつくっておってマーケットシェアーをとることにより、コストを安くして競争力をつけるということだけでは、円の再切上げも予想されるこれからの時代では企業は成り立っていかないと思います。発展途上国の追い上げも大いにあります。だから当然、国際分業ということになると思います。

神戸市は今後ファッション産業ということでやっていくということなんですけれども、ファッションに関しては、フランスあたりにくらべるとまだ日本はだめですね。しかし、そういう情勢においても神戸というまちは、さっきもいいましたように他の都市にはない大きな特色をもっていますので、重工業なんか今後どうなるか分らないというこのような時代において、我々が、ファッションを地域産業としてとりあげるには時期的にいって、まさに絶好のときだと思います。神戸全市をあげてファッション都市へと力を入れる。そのためにはニットでもよろしい、ケミカルシューズでもよろしい、また、家具とか菓子類とかといったものに到るまでも、そこで働いているひとや一般のひとにファッション性の高い意識をうえつけるという意味で、県や市やマスコミや、あるいは業者なりが、一致団結して新しい動きをつくっていくということは非常に意味があると思います。

福富　ファッションといっても何も服飾だけに限らずに今おっしゃったケミカルシューズや家具なども含めまして、最初は日本の、最終的には世界のファッションの市場の中心にならなければいけないと思います。それには何よりも勉強が大切ですね。FITのようなものもこれが出来ればそれにこしたことはないし、そういう色々なものをつくりつつ、最終的には、神戸市にもっとお金が入るようにもしなければいけないと思います。

というのは、神戸市では、東京や大阪にくらべて、何をやってもものごとの成功率が少ないのです。それは神戸が田舎だからというのじゃなくて、要するにお金が余り入らないからです。もっともうけたいという商売関係のひとなんかは皆、東京や大阪へ行ってしまうのです。もっとお金が入ってくるようになればそういうこともなくなるし、そのためには、繰返すようですが、ただ通過するだけのまちというのじゃなくて、神戸市をファッションの市場、基地にしなければいけないということです。

私の理想は、先ほどのポールト・ド・ベルサイユの発表会の小型のものでもいいから神戸でやれたらということです。話にきいております、ポートアイランドをファッションの基地や市場にするという構想は素晴しいと思いますね。ただそのためには県や市やマスコミの援助も必要です。

畑　神戸は今まで造船や鉄なんかの重工業でやって来ました。そこのところに、ある意味で文化不毛の地であるといわれている理由もあると思います。しかし、一方で神戸は、またモダンボーイ、ガールの町です。この際、思い切って、神戸市全体の文化水準を高めることを意識して、市なんかもやっていただきたいと思います。

ところで、今度のファッションの問題を僕らが新聞に書きますと、今までにない熱っぽい反響が返って来るというのが強い特徴として出ております。一般の関心の高さと関係者の生きるというオマンマの問題が背後にあるためだと思います。何か投書一つを読んでいても、グッと来るようなものがあるのです。だから、感触としては、いいときにこのファッションの問題が出て来て、みんながあれこれと論議をするようになったと思っているところです。

難波　最後につけ加えておきますと、神戸は文化的には非常にユニークなものがあるということですね。だからファッション都市ということになれば、そのユニークさを十分に生かせるし、また、生かして行かねばいかんということですね。

（於ブラン・ドゥ・ブラン）

HOYA

バリラックスII発売

老眼鏡よさらば!!

Bi Bi Bi-FOCAL

VARILUX II

バリラックスIIは自然な視力を継ぎ目なく遠くから近くまで見る事が出来ます。

HOYA バリラックスIIレンズ1組　17,000円より

神戸眼鏡院

元町店・元町3丁目 ☎(321)1212代表

三宮店・さんちかタウン ☎(391)1874～5

元町店は毎水曜日がお休みになりました

三宮店は第3水曜日が休みです

ドイツ気質(かたぎ)です

ユーハイム気質(かたぎ)です

"自然"に逆らわず

"純正"であることは

非常にむずかしいことなのです

〈純正材料に徹して50年〉

ドイツ菓子

Juchheim's

ユーハイム

本社	三宮生田神社前	TEL (331)1694
三宮店	三宮大丸前市電筋	TEL (331)2101
さんちか店	三宮地下街スウィーツタウン内	TEL (391)3539
貿易センタービル店	三宮貿易センタービル地下1階	TEL (251)0139

MY・KOBE〈4〉
トア・ロード

筒井康隆

カメラ・杉尾友士郎

海から山の麓までまっすぐ一本通っているトア・ロードと筆者

海から山の麓まで、まっすぐ一本通っているトア・ロードは、神戸でもいちばん有名な通りである。決して繁華街ではなく、むしろ静かだといえるだろう。それでいて両側にはいい店が並んでいる。ある意味ではセンター街よりも神戸らしい通り、ということもできよう。

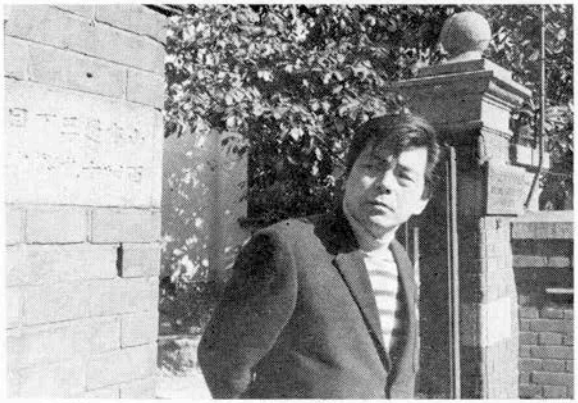
「トア・ロードなら毎日でも行きたい」

浪費癖のある女房などは、そういっている。もっとも亭主にとって女房はすべて浪費癖の持ち主であるが。

というわけなので、今回はどうやら有名店の名前の羅列に終りそうな悪い予感がする。

トア・ロードの語源は、いろいろ取沙汰されているが、結局ははっきりしない。トーア・ホテルのトーアがトアになったのだとか、突きあたりの山の麓に鳥居があり、このTOR……と最初の三文字をとってトアにしたのだとか、いろんな説がある。

突きあたり、つまりトア・ロードの坂を登りつめた左側は神戸クラブという外人のクラブがあり、この中にその鳥居があるという前まで行って中をのぞいてみた。鉄格子の門があり、会員以外は入れないことになっている。取材もおことわりだそうだ。会員は外人ばかりだそうだ。前庭が広く、ミステリアスなムードである。中では麻薬の取引きが行なわれているにちがいないぞ。



異人館のマリーン・エンタープライズKKの門

石垣の彼方に、ちらりと赤いものが見え、小さな鳥居が、たしかにあるにはあった。この鳥居説を唱えたのはジョージ・エブラハムという人で、その人の邸が神戸クラブの向かい側にあった。代表的な異人館だが、今はマリーン・エンタープライズK・Kという会社になっている。中では麻薬の取引きをやっているのだろうか。

エブラハム邸から少し坂を下ると、同じ並びに「まるきや」という古道具屋があり、じつにいろんなものが置いてある。針のない時計まで山のように積みあげてある。中に入ると「星製薬特約店」「星製薬淡路売捌所」という二枚の看板が見つかった。星製薬とは、ぼくの先輩のSF作家、星新一氏のお父さんが作った会社である。星氏が昔の看板などを好んで蒐集していることを知っていたので、その日帰ってから、すぐ東京の星氏に電話した。

「そんな看板を見つけたんですがね。いつごろのものでしょう」

「明治の終りごろか、大正の初めだろうな」

「買っておきましょうか」

「一枚、いくらだい」

「三千五百円です」

「いやあ、それゃ安い。買っといて貰おうかなあ」

数日後また出かけて行き、星氏は一枚でいいと言ったが、あまり安いから二枚とも買って、すぐ星氏宅へ

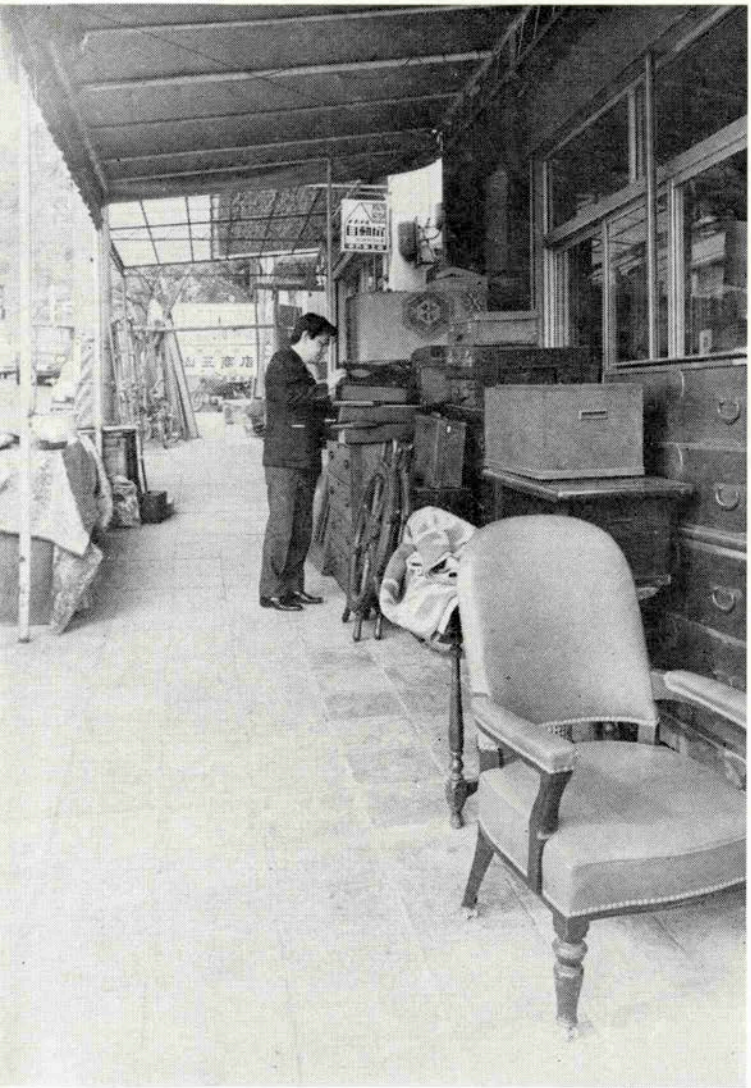
送ってもらった。東京では一枚一万円以上するそうだ。この店の向かい側あたり、ぼくがよく家族づれで行く中華料理の「東天閣」がある。異人館を改造したもので、内部の装飾も面白い。ここの料理のことは一度どこかに書いたが、中華料理とは思えぬ。たいへん淡白な味でぼくの好みである。

「東天閣」少し下ればやはり西側にエスター・ニュートン氏の私邸がある。同じトア・ロードのずっと坂下にある「エスター・ニュートン」のご主人の家だが、今はニュートン氏はなくなられ、奥さんが住んでいる。

中山手・山本通りを横断してさらに坂を下ると、東側に「丸十」という肉屋がある。ここでは仔牛の肉なども買えるそうだ。

西側、北野小学校の下に「聖ミカエル幼稚園」というのがあり、可愛い外人の女の子がたくさん通っている。むろんまだ五歳から六歳だが、こういう子がみな年頃になったら神戸も楽しくなるなと思い、いつも眼を細め、舌なめずりしながら彼女たちを眺める。同じ側の、もと電車が通っていた道との交差点近くに「西湖」という、陳舜臣氏ご推賞の小さな中華料理店があるが、入ったことはない。その少し下の「あこや亭」というどん屋さんにも入ったことはない。うどんは大好きなのだが、だいたいこの辺を歩く時はいつも腹いっぱいで、腹ごなしの散歩をしている時なのである。

生田新道を越えると西側に「白石美陶社」があ



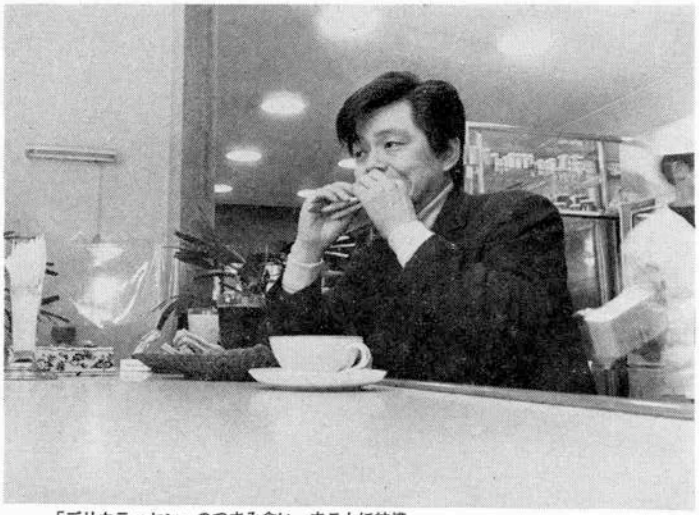
「星」の看板を見つけた古道具屋

り、女房はここでティーポット、ティーカップなどを買っている。値のわりにはよく見える食器が、たくさん並んでいる。その下の「シンコーフラワー」では、この間花の植木鉢を二十ほど買った。その前にも熱帯植物の鉢植えなどを配達してもらっている。ぼくの結婚式の時、宝塚ホテルまで花束を届けてもらったのはこの店である。その下の「アメリカン・ファーマシイ」、ここで買った台所用品は数多い。機能的なアメリカ製品ばかりである。さらに、その下の「エスター・ニュートン」は女房のあこがれの店である。なぜあこがれかというと値段が少々高いからだそうで、それでも無理をしてちょいちょい買っている。センス抜群、伝統のあるオートクチュールである。その下の舶来雑貨「クロス」も世界の名品を多く置いている店だ。調味料セットとマガジン・ラックしか買っていないのは申しわけない。子供づれだと入りにくいためもあるし、閉店時間が早いためもある。向かいの東側に行こう。まずサロン・エレガン「サノヘ」がある。東京にいる時、女房は渋谷東急の「サノヘ」へよく行っていたが、ここへはまだ来ていないそうだ。「真記」というのは、このあたりに多い中国人のやっている洋服屋さんのひとつ。その下の（さっきから、その下、その下と書いているのは坂下の意味であって、階下ということではない）婦人帽子店「マキシン」は全国的に有名。その少し下の「サント・ノーレ」は、飲み歩こうとする時の待ちあわせ場所、つまり出発点にすることが多い。

「れんが亭」の前を歩いて、トア・ロード三美人のひとり、「れんが亭」のママとすれ違い、会釈してもらった。三度行っただけなのに顔を憶えてもらったらしい。ちょっといい気になる。三美人のあとの二人は、もう少し下の伊藤家具店の二階にある喫茶「把恋」のママと、ずっと浜側の「亀の井亀井堂」のママである。「把恋」のママには不幸にしてまだ拝顔の栄に浴さない。

少し下って「デリカテッセン」がある。ハムやソーセージを売っていて、店の奥のカウンターでつまみ食いをすることもできる。三、四種類切ってもらって食べたが、まことに結構であった。

国電のガード下を通って浜側へ行き、さらにいろんな店のことを書きたいのだが、残念ながら今回はここで枚数制限いっぱい。



「デリカテッセン」のつまみ食い、まことに結構

経済ポケット ジャーナル

★いよいよ動き出した阪神総合卸商業団地

貿易センタービル24Fレストラン・バーグで2月22日、阪神総合卸商業団地協同組合創立披露宴が催された。当日は、坂井時忠（兵庫県知事）宮崎辰雄（神戸市長）など、要人、経済人など多数の参会を得て、盛大にその前途を祝った。

盛大な創立披露パーティ風景

柏井健一同組合理事長は「周到な計画と立案によって兵庫県下90社の力を結集し、新しい、コミュニティー造り、未来のあるべき街夢と機能化を最大限に実現させる街づくりを目指し、公害、従業員福祉なども万全を期したものとしたい」と抱負を述べた。

なお、同事務所を、神戸商工会議所内、電話251・2003におき、昭和48年4年1日を初年事業年度とする。

★神戸銀行と太陽銀行合併「太陽神戸銀行」に

地元神戸を営業の中心地盤とする神戸銀行と、東京を営業の中心地盤とする太陽銀行との合併が、二月十三日、地元神戸で、宮崎十一神戸銀行専務の手から発表された。

両行はこの合併により、一挙に預金量で都市銀行中第六位に躍りあがる。三兆一千億円にのぼる資金量が「太陽神戸銀行」の融資先の拡大に大きく寄与することは間違いない。また両行の営業地盤が、神戸・京阪神と東京首都圏と、おたがいに片寄っていた店舗網もこの合併でバランスのとれたものになる。

石野信一神戸銀行頭取は「合併はゴールでなく出発点。よい銀行に育てたい」と意欲十分。また河野一之太陽銀行頭取は「互譲の精神で」と石野氏をバックアップする態勢十分。また、この合併は大蔵省の吉田銀行局長も歓迎の意を表わしており、「太陽神戸銀行」の活躍が期待できる。

神戸銀行本店

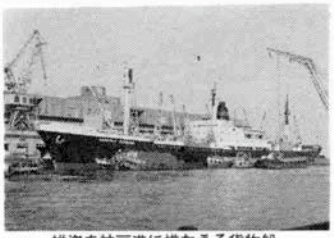
太陽銀行本店

★港神戸の面目躍如 貨物取扱量日本一

神戸港の去年一年間の取扱総貨物量は、四十六年に続いて一億トンを突破、横浜から奪った〝日本一〟の座を二年連続で保持した。

同市港湾局の統計速報で明らかになったもので世界でも五位以内にはいっていることは確実とみている。

神戸港の貨物取扱量のうち、国内貿易が移出入計九千二百七十万トンと圧倒的である。一方外国貿易は輸出入計三千百三十八トンと横ばい状態を続けた。



雄姿を神戸港に横たえる貨物船

★KOBEオフィスレディ★

中村百合子（21歳）

協和銀行〈神戸女子商業卒〉

うさぎのごとくトラックを駆け、カモシカのごとくハードルを飛び越えたという活発な女の子だった彼女。今は協和銀行神戸店に勤務し、雨煙る一人の日曜日には、遠くに行った彼のもとへ長い長い手紙を書きたいという。JAZZを聴きながら珈琲の香りを楽しむのが好き。

おとどけします
幸福を

ウエディングケーキ ¥ 8,000ヨリ

北欧の銘菓
ユーハイム・コンフェクト

■本 社・工 場　神戸市葺合区熊内町1(市立美術館東隣)　TEL. 221－1164
■三宮センター店　神戸三宮センター街(洋菓子・喫茶・レストラン)　TEL. 331－2421
■さんちか店　神戸三宮地下街スイーツタウン　TEL. 391－3558

O-SHIBATA

気品と格調を保ち
幅広く装う柴田洋服店

O-SHIBATA
㊟柴田音吉洋服店

神戸・元町4丁目南　神戸 341－0693
大阪・高麗橋2丁目　大阪 231－2106

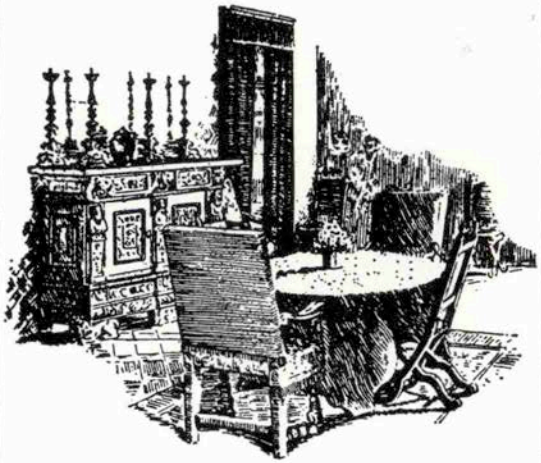
やわらかな日差し。ちいさな春。そして微笑。

華やかさで迎えます。

世界を結ぶ手づくりの味

ゴンチャロフ

欧風家具・婚礼家具



設計・創作

永田良介商店

神戸市生田区三宮町3丁目 大丸前　TEL 神戸(391)3737（代表）

東京店・東急百貨店 日本橋店内6階 TEL 03(221)0511
本店(渋谷)7階 TEL 03(462)3180

工場 神戸市垂水区多聞町小東山975—35
神戸木工センター TEL (078) 706—5005 (代)